

「びょうぶ型人生」を考える

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

新聞や雑誌、とりわけパリで編集されて東京で印刷されている日刊新聞の「ヘラルドトリビューン」や、同じくロンドンで編集され香港で印刷されている週刊経済誌「エコノミスト」をカバンの中に入れて折にふれ読むようにしていると、どんなに経済的な危機が目の前に押し寄せてきているかがよく判る。

*日本の本当の姿や世界の動きが何なのかを知りたい人は、日本の新聞や雑誌を読むだけでなく、外国でつくられている新聞や雑誌を定期購読することをおすすめする。金融関係にお勤めの方や株式投資をなさっている方、会社の経営幹部は、会社の大小を問わず、外国の新聞や雑誌をガンンしてでも毎日お読みになること。ただ、外国の雑誌といってもタイムやニューズウィークなどは、日本の新聞社で出している週刊誌と同じレベルなので、これからの仕事をどう考えるかという観点からはあまり有用ではない。

前置きが長くなって恐縮だが、「世界同時恐慌への突入」などという話題が多いので、今回はそのような経済状況の中、どのように自分自身を見失わず人生を全うできるかという観点から「びょうぶ型人生」を考える。

2. 「びょうぶ型人生」のすすめ

①「びょうぶ」は1枚のものもあれば、2枚のもの、3枚のものといろいろある。5～6枚が限度のようで、枚数が多いものはあまり見かけない。私は、自分の人生をびょうぶに見立てて、これからの高齢化社会を生きることをおすすめする。

②まず大切なことは、自分の人生のびょうぶの枚数を決めることだ。私の人生はこれだけと、一つのことを命を懸ける人のびょうぶは1枚。私の人生には二つ全力投球してやってみたいことがある人は、2枚のびょうぶ。やってみたいことが三つある人は3枚のびょうぶ。このように自分の人生でやりたいことが一体いくつあるかを考え、びょうぶの枚数を決めることが大事だ。

③目標を持って生きるなどという難しいことは考えたくもないという方は、それはそれで素晴らしい生き方だ。しかし、どうせ生きるのなら、自分の本当にしたいことは何か、つまり「生き甲斐」とは何かを一度は考え、理想の人生に向かって生きる努力をする方が、もっと素晴らしいのではないと思う。ダラダラ時間の過ぎ行くままに身を任せ、死ぬ間際になって「一体私の人生は何だったのだろうか」と悔やむよりは、自分の人生の目標を定め、少しでもその理想に近づくようあれこれ創意工夫を繰り返す方が、「心豊かな生活」が送れるのではないか。

④だから、これからの人生で一体自分はどんな生き方をしたいのか、十分考える時間をたまにはもった方がよい。その時には、現在の状況はとりあえず横に置いておき、まずは自分の人生の目標や、やりたいこと、理想を考えること。強い人生観や生き方、理想はその人にもものすごいエネルギー、生きる力を与える。びょうぶの枚数をとりあえず決めること。

⑤自分の人生は、たとえ何才であってもスタートできる。10才であっても人生の目標を持って、一途に歩んでいる人もいる。ただ、たとえあと1時間しか生きられない人でも、その1時間をできるだけ充実した生き方をしようと思えばいくらでも可能だ。びょうぶはいつからでも作り始められる。一度目標をもって生きようとしたが、途中であきらめざるを得なかった人は、気持ちの整理がついたら「新しいびょうぶ」をつくり始めればいいだけだ。何枚かのびょうぶの内一枚を取り替えなくなったら、それを取り外し別のびょうぶをつくり始めればよい。取り外し自由なのもびょうぶの良いところだ。目標が出来上がってしまった、つまりワンセットびょうぶをつくり終えたら、別のワンセットをつくり始めるのも更に面白い。今度は、もっと趣のあるワンセットになるかも知れない。何セットか連作でびょうぶをつくろうと考えるのも素晴らしい。

⑥次に大切なことは、そのびょうぶの大きさや高さ、材質をどうするかということと、どのような絵をそのびょうぶに描くかということだ。つまり1枚1枚のびょうぶの内容をどうするかが次の問題となる。

これから先のことはよく判らないが、もしそれほど経済の混乱がないとすれば、(もしあっても欧州と同じ程度、つまり失業率が10%台前半位までで止まるとするならば)まだまだ世界の多くの国々と比べて日本は、経済的に豊かな国と言える。日本国内のみならず海外に行き、情報も含めいろいろなものを入手することができるのが今日の日本だ。だから、人生の目標がいくつか決まり、何かやりたいことがあれば、日本国内で最高レベルの情報がいくらでも手に入るし、日本で最高レベルの人達やそのグループに入ることもできる。やりたいことを決めたら、せっかくの人生だからあまり遠慮する事なく、その分野で日本で最高レベルの人からの指導を最初からお受けになることをおすすめする。

⑦私事になって恐縮だが、何十年前に私は、足利市立山辺中学校で柔道部に入らせて頂き、中学2年生の新人戦や中学3年生の県大会で団体優勝させて頂いた。その当時椎名弘先生という先生が指導に当たられたが、あとでお聞きすると椎名先生が教えた柔道部のほとんどが地区大会はもとよりのこと、県大会で優勝かそれに近い成績を残し、関東大会まで進む方も多かったということである。このように指導者の力は果てしなく大きい。何か一つのことを極めたいと思うなら、よい師を捜してその方の指導をはじめから受ける方がよいと思う。

⑧日本である程度までいったら、世界でここぞというところにも遠慮せず出掛け、どんどんと世界最高水準にまで近づくこと。

*英語や外国語はできた方がよいが、英語や外国語が完全に身に付くまで待っていたらいつになるかわからないので、とりあえず意を決して外国に出掛けてみることを。意思さえ強ければ必ず道は開ける。恐れないことだ。

⑨びょうぶの内容は、自分のやりたいことであるので何でもよい。ただ、びょうぶの1枚に「家族や自分の健康維持のこと」、もう1枚に「自分の仕事の充実のこと」、もう1枚に「自分自身の人生を豊かにする趣味のこと」、もしできればもう1枚に「地域社会や地球のためにどんなことでもいいから何かやれること」が入ったら、素晴らしい。

3. 終わりに。「生涯現役」「一生勉強」のすすめ

①私は「生涯現役」「一生勉強」という生き方をおすすめする。

②上智大学の広報誌「ソフィア」の1997年秋期号に、「ドイツの大学における高齢者教育」という三輪健二先生の論文が載っていた。(以下はその300～302ページよりの引用である)

「高齢者研究ではこれまで長い間にわたり、高齢の成人は新たなものを手に入れたり未知のものを知ろうとすることをためらう人々であると考えてきた。しかしその間にも年金生活にある高齢の成人がこれまでの生活スタイルにこだわるだけでなく、新しい関心領域、経験領域、行動領域を開拓していることを示す十分な証拠があったのである。かなり多くの高齢の成人が生徒や学生とかわらない旺盛な知識欲を持っている。

これまでは、成人は加齢するにつれて新知識を学ぶ能力が落ちると信じられてきた。小さなハンスちゃんが学ばなかったことは、大人のハンスになっても学ばない、といったことわざは、加齢に伴う学習能力の制約についての予測を印象づけてきた。しかし、これは本当なのだろうか。偏見に過ぎないのではないか。近年の調査によって学習は何才になっても可能であることが明らかになっている。高齢の成人は原則として学習能力が落ちるのではなく、若者とは違った学び方をするのである。高齢期の学習能力の減退について語るよりはむしろ、学習の変化について語るべきなのである。

高齢者の大学での学習動機は多様であり、①退職後の人生を意味あるものにし、人生を豊かにしたい、②専門的関心を拡大し、深めたい、③青年期や家庭生活の時期にかなえられなかった教育を取り戻したい、④退職前の人々にとっては職業教育や人格教育による新しい方向付けを求めようとしたり、⑤社会的なコミュニケーションや仲間づくりを要求することも多い。高齢者のための教育活動は社会的孤立や孤独感を打ち破りたいと考える高齢者に好評なのである。

高齢者が大学で学習する形態は正規の学生となる場合、聴講生になる場合、およびシニア学習プログラムの特別聴講生(シニア学生)となる場合に分けられる。正規の学生と登録した高齢者はかなりの時間を使って全体的な学習を終了することができる。これに対して聴講生とシニア学生は原則として、大学入学資格をはじめ修了試験や修了証書も求められない。

シニア学費では、大学は高齢者向けの独自のプログラムを用意すると同時に、相談事業、オリエンテーション事業などによって学習活動の支援を行っているところが多い。1995年では35の大学で12000名を超える高齢者がシニア学生として登録されていた。シニア学生のほぼ3分の2は週に3～4時間程度の講義やゼミナールに参加している。予習と復習に充てる時間は週に2時間あまりである。彼らの残り3分の2は、高齢者向けの学習プログラムに時間を割いている。

高齢者全体に話を戻すと、彼らの専門分野や関心テーマは、人文科学に集中している。歴史学、文学、言語学は高齢者が特に好む分野である。高齢の学習者はまた、社会学のテーマや心理学のテーマにも強い関心を示している。男性と女性の間ではテーマについての好みに違いが見られる。高齢の女性が文学・語学・心理学について関心を持つのに対して高齢の男性は社会的テーマや経済的テーマに関心を払っているようである。」

③最後に。「市民のびょうぶ」を広げるためにできる行政の役割も多い。「すべての市町村に市町村立の大学院・市町村立の大学の設置」を強く願うものである。